柳宗悦と民藝運動の周辺（四）

――未来へのヴィジョン――

松田伸子

吾々は日本人であります。それ故日本人としての生活に悦びを抱きます。併し考えてみますと、吾々が現在用ゐてゐます品物にどれだけ日本的なものがあるでせうか。都会の生活などを見ますと、それが甚だ乏しくなつてゐるのを気附きます。知らず識らずの間に、余りにも沢山西洋風のものを取り入れて来たからであります。それは明治この方起つた著しい変化でありました。それ以前の日本人は殆ど凡て純粋に日本のものばかりで暮らしてゐました。さうしてそれ等のものには立派なものが沢山ありましたが、新しい時代では一途に古くさいものと思ひ込まれました。従つてその値打ちが軽く見られ、日本的な多くのものを惜気もなく棄て去りました。(一)

現代日本の暮らしの現状を柳はこう語っている。人は常に過ぎてきた時代を〈古き良き時代〉として懐かしさを込めて語るものである。しかし、そういった薄っぺらなセンチメンタリズムでは到底片付けてしまうことのできない問題が、柳の言うとおり「日本的なものを惜気もなく棄て去」ってきた明治以降の日本には確かにある。それは、家の中に始まって、家並み、町並み、さらには地域全体の風景にまで及ぶ生活全般の荒廃という人間の在り方そのものに

一

関ってくる重大な問題である。明治の新体制が西洋近代主義を国家運営の基本に据え、上から押し進めてきた理詰めの改革によって、日本の伝統的な自然美と生活美は脅かされてきた。その状況は、時と共にさまざまな紆余曲折を経たとは言え、基本的には今日に至るまで少しも変わらぬものであろう。むしろ、街並みの醜さ、住まいの貧弱さなどを、多くの日本人がもはや耐え難いものと感じるようになるまでにこの問題は深刻化していると言ってよい。

日本固有の自然と歴史の産物である伝統的な生活空間や風土に深く鋳込まれた思想を、日本人はいたずらに抽象化、あるいは観念化することなく、生活様式そのもの、生き方そのものの美しさで表現してきた。茶道という一つの思想の在り方がそれを最も雄弁に語っていると思う。加藤周一の表現を借りれば、「美のために何ごとでも忍ぶことのできた」日本人は、「同時に観念のためには何事も忍ばない国民であった。」「殉教も宗教戦争も起こりようがな」く、「価値の意識は常に日常生活の直接の経験から生みだされた」[二]のである。しかし日本人のそういった独特な思想性を支えてきた伝統的な自然美や生活風景の美が失われてしまった日本において、日本人は本当に寄る辺のない迷い子ではないのか。さまざまな概念やイズムの嵐の中で、この世に生きるための有効な拠り所を何一つつかみ取ることのできぬまま、翻弄され続けるばかりではないのか。このような、何処にも寄る辺のない魂の漂泊感が、日本の自然と伝統とに根差した日常生活品を具体的な手掛かりとする柳のユートピア的運動の根底にあったのだと思う。「吾々は日本人」であるということ、そして「それ故日本人としての生活に悦びを抱」くのだという、本来ならば一人一人の日本人の生の当然の原点である事実を、柳は新たに確認することから始めねばならなかったのである。

吾々は日本人でありますから、出来るだけ日本的なものを育てるべきだと思ひます。丁度支那の国では支那のも

のを、印度では印度のものを活かすべきなのと同じであります。西洋の模造品や追従品でないもの、即ち故国の特色あるものを作り、又それで暮らすことに誇りを持たねばなりません。たとへ西洋の風を加味したものでも、充分日本で咀嚼されたものを尊ばねばなりません。日本人は日本で生れた固有のものを主にして暮らすのが至当でありませう。(三)

「日本人」であるゆえに「日本的なものを育てるべき」であるとか、「日本人は日本で生れた固有のものを主にして暮らすのが至当」であるというような表現には、ともすれば恐ろしく感情的で偏狭な愛国心の現れとも読まれかねない響きさえある。しかし実のところ、いかなる分析によっても説明しきれるものではない厳然たる人間的真実を、柳はただ率直に語っているにすぎない。その率直さが生み出す表現の単純さは、この文章が書かれた頃――すなわち太平洋戦争たけなわの日本――に溢れていた一途な愛国主義的感情論に見られるような論理の欠如からくる単純さとはっきりと区別されねばならない。そのことは、柳の言葉の中の「支那では、支那のものを」、そして「印度では印度のものを」尊ぶべきであるという主張からも明らかであろう。

「日本人」なるが故に「日本的なものを育てるべきだ」という柳の主張は、空回りの感情論とは程遠いこと。そしてその主張を柳が繰り返す背後には、日本人が長い年月をかけて獲得し、蓄えてきた思想的体質や文化的体力を今一度回復することなしでは日本人としての確固たる生は到底確保し得ないのではないかという深い危機感があったということ。この二点は、次の一節からさらに明確となるはずである。

国民は今、過去にこれ〳〵の文化があったと云ふことだけで、自国を誇ってはならないのです。それより現在か

三

く〳〵の暮し方をしてゐると云ふことで、自国の名誉を語らねばならないのです。過去の優れた文化は自信を増さしめる力にはなるでせう。併し現在の生活に現れる文化度が低くば力弱い存在に過ぎないのです。… 法隆寺の建築が美しいことは日本の誇りです。ですが現在国民が住む住宅が健全なものとなることは、さらに大きな誇りでなければならないのです。

吾々は今の暮らしの中に確乎たる日本文化を建設せねばなりません。さうしてかかる暮しを一番如実に反映し表現するものは、其の暮しに深く交る日常の調度什器なのです。衣服、器具、食器、それ等の凡てを包含する生活工藝の領域なのです。さうして是等のものを綜合する建築なのです。(四)

民藝運動の創始者としての柳の仕事の強さは、「こと」的な西洋の近代主義との対決に於いて、彼が宗教哲学者として立った頃のように「こと」で臨もうとはしなかったことに在るように思う。それがもし「こと」対「こと」の対決であったならば、柳の仕事に到底勝ち目はなかっただろうと思う。西洋近代の行き詰まりというようなことが盛んに言われてはいるけれども、それにはそれ自体の伝統の上に築き上げられた強さがある。簡単に論駁される程根の浅いものではないのである。

この世の様々な事象の不透明さ、曖昧さを嫌った近代主義は、この世に在る「一切の」「複雑極まる結縁によって組み重な」っているものを、(五)順々に解きほぐしてゆくことで、究極的には完全な明快さに辿り着けるはずだと信じた。実のところ、その過程は「もの」から離れて、世界を「こと」的に扱うことによって初めて可能なプロセスであった。他の多くの国と同様、その近代主義の行き方に引っ張られ、自らも痛ましいまでの努力でそれについてきた日本に柳は生まれ、その行き方に否応無く振り回されて成長したのである。しかしその行き方についてゆくことに次第に違和

感を深めていった柳は、物事の不透明さ、互いに絡み合い生起しあう結縁の捉えどころのなさに世界の実相を見るようになったのである。宗教哲学者としての柳の視点は既にそこにあった。しかし、彼の世界が美しく慕わしい物との出会いを経て「こと」の世界から「もの」の世界へと変質し、真に実体を獲得した時、初めて西洋近代と対等に並び立ち、それによって西洋近代の価値体系を相対化し得るだけの揺るがぬ強さを持ち得たのである。

この両者が並び立つという状況は、日本という枠から外に向かっては、西洋近代の弱点を克服してゆく為の一つの具体的な方途を圧倒的な説得力で示していると言えるだろう。民藝運動の現状について、「近頃の趨勢では、残念にも外国人の方に却って公平な理解者が、急速に増加してゐる有様」であり、それは「全く変則的現象」(六)であると晩年の柳は言っている。そういった状況は、柳の本来の意図からすれば、なるほど「残念」な「変則的現象」であるかもしれない。しかし、それは本質的には決して「残念」ことでも、「変則的現象」でもないことは言うまでもないだろう。

こういった副産物的な外への波及はさておき、内に向けては、「もの」に根差した日本固有の暮らしの在り方、価値の在り方、あるいは思想の在り方が、今日の日本にも再び蘇り得る可能性を示してくれているのである。

ガラス越しにではなく、直にこの世界のありのままを見たい、そしてそれに触れたい。生きるということを〈自分〉という名の他人が演じる芝居を見るようにではなく、自分自身のものと感じたい――柳の仕事の根底に常にあったものは、このような、世界の実相を自分自身の眼で、そして自分自身の手ではっきりと確かめたいという極めて個人的な、しかし人間としてごく本源的な願望であったように思う。

その意味で、『美の法門』を建て『仏教美学』を樹立して行った崇高な」柳の「美思想」(七)というような言い方を安易に振り回すことはできないように思えてならない。大地や息づく自然、そしてそれに根差した確かな暮らしとは絶

五

縁してしまったかに見える今日的なイズムとしての思想が思想の主流であるならば、思想とは何かということ自体をまず問題とせねばならないだろう。

また一方で、民藝運動をそれが扱う様々な物の美しさという現象面だけで捉えてもいけないだろう。自然と伝統に守られた美しい物も、それが人の暮らしに参加することで逆に今日の暮らし方を変貌させてゆく契機とならねば、その物の美しさの意味は失せてしまう。少なくとも柳のユートピアンヴィジョンに於いては。「之までの民藝品など今の生活には合わず、只古くさい骨董的値打ちがあるだけ」という批判(八)に対して、柳は次のような問い掛けを静かに返している。

吾々の生活は日に新しく変化してゆく。併しそれは品物が吾々の生活に不釣合になったのか、吾々の生活の方が品物に対して不似合になったのか、一応考へる要があらう。私共は何も之までの品が、今もそのままで皆使へるなどと考へてゐるのではない。だがそれよりも私達の今の生活そのものが、このままでよいのかと問ふ方が、大切だと思はれてならぬ。……

……民藝品の方では今の人間にかう云つてゐるであらう。「君達の暮らしを、もつと健康なものに戻せぬのか」と。弱々しい数寄屋普請の暮らし、か細い柱や障子の部屋、安つぽい洋間の文化住宅、二三流の西洋的な暮らし方、誤魔化しものに囲まれてゐる日々。いらいらした都市の生活、現代のかういふ生活にすぐ合わぬからと云つて、民藝品を骨董扱ひにするのは、近代人の僭越な又得手勝手な考へだと云へよう。(九)

柳自身が見届け、またこの世の凡ての人々にも見て欲しいと願った美しきユートピアのヴィジョンは、美しい物を暮

らしの彩りとして加えるだけでは実現されるものではない。美しい物との密な交わりの中、知らず知らずのうちに互いが互いを育て合う暮らしが生まれてくる。そんな暮らしの中から生まれてくるはずの新しい人間関係、新しい価値観、新しい感受性をこそ柳は夢見ていたのである。

民藝運動の一環として柳は茶道の改革を叫んだ。それに関して多くの文章を書き、彼の考えを具体化した茶会を催したりもした。生活美学としての本質を失い形骸化した今日の茶道ではあっても、柳はその源流に彼のユートピア実現の一つのモデルとなるべき日本の暮らしの在り方の生きた姿を見たからである。しかし、柳の茶道関係の活動に対して、その背後にある壮大なヴィジョンを見通せなかった茶道史家の桑田忠親は、「柳氏は、たゞ民芸品の美を丹念に解明して下されば、それで十分である」と冷ややかな言葉を浴びせかけた。(十)それが世間で有力な一つの民藝運動評価を代表するものであることは否定できないだろう。しかし、柳はその言葉にたじろぐことなく、それを正面から受けとめて次のように言ったのである。

私はこの三、四十年にわたる長い期間、文字通り倦まずにこの事を果たして来たつもりであるが、茶人達のだれがそれを深く考慮に入れて、茶の改革にいそしんでくれたであろうか。只丹念に民藝品を解明してゐるだけでは、仕事は大いに不充分だといふことを、私は身を以て体験してきたのである。(十一)

こういった言葉が示すとおり、柳のユートピアの達成度は決して高くはない。「私の見るところでは、民藝館の本当の正解者など、未だ殆どゐないのだと思はれてならない」(十二)とさえ彼は言わざるをえなかった。昭和三十四年、柳七十一歳の最晩年の言葉である。しかし、これをとらえて、柳の美しきユートピアはただの見果てぬ夢であったと言うこと

七

はできない。夢に見た理想の実現が可能であることを信じ、それに向けてこの世の現実とのひるまぬ対峙を続けてゆく生き方そのものにユートピアヴィジョンの真諦はあるのだと思う。

〈注〉

（一）『手仕事の日本』、『柳宗悦全集』第十一巻（筑摩書房、昭和五六年）、十七頁。なお『柳宗悦全集』からの引用は、以後『全集』及び巻数のみを記す。また柳の文章には改めて執筆者名は記さない。

（二）加藤周一『日本人とは何か』（講談社、昭和五一年）、一〇〇―一〇一頁。

（三）『手仕事の日本』、『全集』十一、十八頁。

（四）「物と文化」、『全集』九、三一八―三一九頁。

（五）「古丹波の美」、『丹波の古陶』（私家本、昭和三一年）、『全集』十二、三四九頁。

（六）「桑田忠親博士へのお答へ」、『陶説』第七七号（昭和三四年八月）、『全集』十七、四七五頁。

（七）水尾比呂志「戦後の民藝運動」、『全集』十〈解説〉、七七一頁。

（八）『民藝の立場』、『芸術新潮』第五巻第八号（昭和二九年八月）、『全集』十、二五四頁。

（九）同上、二五四―二五五頁。

（十）桑田忠親「名陶談議（七）」、『陶説』第七五号（昭和三四年六月）、五二頁。

（十一）「桑田忠親博士へのお答へ」、『全集』十七、四七三頁。なお、柳はこの反論の冒頭で「『陶説』の（第七六号）に桑田氏の一文」があるとしているが、誤り。実際には第七五号に掲載された。

（十二）同上、四七六頁。